野の花
―春―

岩波写真文庫　45

野の花　春　45

岩波写眞文庫 45　野の花 ―春―

編集　岩波書店編集部
監修　武田久吉
写眞　武田久吉
　　　岩波映画製作所

ジロボウエンゴサクは地下の球状の塊茎から15 cmほどの軟弱な茎を出し，こまかくきれた葉をつける．花は淡紫紅色で形は，ヤブケマンと同じ．写眞は2倍あまりに廓大．

私たちが、校庭のすみや、ピクニックの途中などで、ふとこれは何という花だろう、どんな性質の草であろうかと、疑問をもつことはしばしばあるのに、しらべる手がかりがなかったりおっくうに思われたりして、ついそのままになってしまうのはまことに残念なことである。美しいと感じ、ふしぎを抱いた野の花を、すっかり自分のものとするには、深い観察が必要であるが、その最初の手引としてまとめたこの本は、従來ある図鑑等とは違って、この文庫の特色を生かし、写眞で自然の姿をありのままに示した。

これはさらに続いて計画されている秋の花、高山の花、浜辺の花など一連のものの初めの一冊であり、植物に親しむ人々のために企てられたものである。本の中の田島ヵ原、多摩丘陵など、東京近郊の撮影実地指導には東京大学理学部植物学研究室の水島正美先生があたられた。

定価100円 1951年8月30日第1刷発行 1958年7月20日 第6刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

この本に載っている花の科別表

		頁
	キク科 (*Compositae*)	
タンポポ	*Taraxacum hondoense*	4, 5
シロバナタンポポ	*T. albidum*	表紙
フキ	*Fetasites japonicus*	6, 7
ムラサキタンポポ	*Leibnitzia Anandria*	8
アズマギク	*Aster dubius*	9
ハハコグサ	*Gnaphalium multiceps*	9
	レンプクソウ科 (*Adoxaceae*)	
レンプクソウ	*Adoxa Moschatellina*	10
	ゴマノハグサ科 (*Scrophulariaceae*)	
オオイヌフグリ	*Veronica persica*	11
ムラサキサギゴケ	*Mazus Miquelii var. stolonifer*	12
	唇形科 (*Labiatae*)	
キランソウ	*Ajuga decumbens*	13
オウギカズラ	*A. japonica*	13
タツナミソウ	*Scutellaria indica*	14
トウゴクシソバタツナミ	*S. abbreviata*	15
ヤマタツナミソウ	*S. pekinensis var. transitoria*	15
オカタツナミソウ	*S. brachyspica*	15
ラショウモンカズラ	*Meehania urticifolia*	17
	ムラサキ科 (*Boraginaceae*)	
ヤマルリソウ	*Omphalodes japonica*	16
	キョウチクトウ科 (*Apocynaceae*)	
チョウジソウ	*Amsonia elliptica*	16
	サクラソウ科 (*Primulaccae*)	
ノサクラソウ	*Primula Sieboldi forma spontanea*	18, 19
	スミレ科 (*Violaceae*)	
スミレ	*Viola mandshurica var. ciliata*	20
ナガハノスミレサイシン	*V. Bisseti*	21
スミレサイシン	*V. vaginata*	21
エゾノタチツボスミレ	*V. acuminata*	22
ケマルバスミレ	*V. Okuboi*	23
マルバスミレ	*V. Okuboi var. glabra*	23
アオイスミレ	*V. nipponica*	24
ヒゴスミレ	*V. chaerophylloides*	25
エイザンスミレ	*V. eizanensis*	25
コスミレ	*V. meta-japonica*	26
ニョイスミレ	*V. verecunda*	26
シハイスミレ	*V. violacea*	27
アケボノスミレ	*V. Rossii*	27
ヒナスミレ	*V. Takedana*	28
フモトスミレ	*V. pumilio*	28
ツボスミレ	*V. grypoceras*	29
ケタチツボスミレ	*V. grypoceras var. pubescens*	29
	トウダイグサ科 (*Euphorbiaceae*)	
ノウルシ	*Euphorbia adenochlora*	30,31,32,33,34
	マメ科 (*Leguminosae*)	
レンリソウ	*Lathyrus palustris var. Linearifolius*	35
カラスノエンドウ	*Vicia sativa*	36, 37
レンゲソウ	*Astragalus sinicus*	38, 39
ニワフジ	*Indigofera incarnata*	37
	バラ科 (*Rosaceae*)	
ミツバツチグリ	*Potentilla Freyniana*	39
ヤブヘビイチゴ	*Duchesnea indica*	40, 41
	十字花科 (*Cruciferae*)	
タネツケバナ	*Cardamine flexuosa*	41
	エンゴサク科 (*Fumariaceae*)	
ジロボウエンゴサク	*Corydalis decumbens*	1
ムラサキケマン	*C. incisa*	42
ミヤマキケマン	*C. hondoensis*	42
	ケシ科 (*Papaveraceae*)	
ヤマブキソウ	*Hylomecon japonicum*	43
	メギ科 (*Berberidaceae*)	
イカリソウ	*Epimedium macranthum var. violaceum*	44
ルイヨウボタン	*Caulophyllum robustum*	45
	ウマノアシガタ科 (*Ranunculaceae*)	
フクジュソウ	*Adonis amurensis*	45
ウマノアシガタ	*Ranunculus japonicus*	46, 47
イチリンソウ	*Anemone nikoensis*	48
キクザキイチリンソウ	*A. altaica*	48
アズマイチゲ	*A. Raddeana*	48
ニリンソウ	*A. flaccida*	49
ヤマシャクヤク	*Paeonia japonica*	50
オキナグサ	*Pulsatilla cernua*	50, 51
	センリョウ科 (*Chloranthaceae*)	
ヒトリシズカ	*Tricercandra japonica*	52, 53
フタリシズカ	*Chloranthus serratus*	52
	ラン科 (*Orchidaceae*)	
ホクロ	*Cymbidium virescens*	54
エビネ	*Calanthe discolor*	54, 55
クマガイソウ	*Cypripedium japonicum*	56
アツモリソウ	*C. speciosum*	57
	アヤメ科 (*Iridaceae*)	
ヒメシャガ	*Iris gracilipes*	3
シャガ	*I. japonica*	58
	ヤマノイモ科 (*Dioscoreaceae*)	
キクバドコロ	*Dioscorea septemloba*	58
	ユリ科 (*Liliaceae*)	
シロバナショウジョウバカマ	*Heloniopsis japonica*	59
カタクリ	*Erythronium japonicum*	59
ナルコユリ	*Folygonatum falcatum*	60, 61
チゴユリ	*Disporum smilacinum*	62
	サトイモ科 (*Araceae*)	
ウラシマソウ	*Arisaema Urashima*	62, 63
	トクサ科 (*Equisetaceae*)	
ツクシ	*Equisetum arvense*	64

春の野に菫つみにと来し吾ぞ野をなつかしみ
一夜宿にける（山部赤人）

万葉の昔から、日本人の祖先たちは野の花を愛した。平安朝の時代にも、花合せといって、おたがいに野につんだ花の優劣をきそいあう遊びが、優雅なこととして貴ばれていた。春秋の七草をさだめ、正月にはかゆにたいて祝意をこめ、さらにはそのような野の花に対する愛着が生花や盆栽や箱庭にも発展していった。國土の位置、環境から、四季の別があきらかで、ことに冬にとざされたあとに訪れてくる春の野の美しさを、心ゆくまでたのしむことができるのは日本人の幸いであった。それは、わが民族の心をゆたかにし、とめどない詩情をやしなってくれた。

しかし、一方、野の花をめで、また進んでそれを栽培した日本人の精神に思い及ぶなら、多くはつねに観賞のみを中心にしていて、それに対して科学的な知識をもとうとする態度に欠けていたことは、否定できまい。少くとも、早くから野草の種類、性質などに正確な知見や体系をもとめて、そうした基礎のうえに、生物学や薬学、農学などの成果をおさめていった西欧の人々にくらべるなら、私たちの日常身のまわりをとりまく植物に対する知識の貧弱さは、あらためてかえりみられる必要があろう。

さりげなく私たちが目にとめている春の野の花の中には、本書にもその一端が明らかにされるように、多年かかってふかく大地に根をはりじりじりと息長く成長してゆくものもあれば、ひと春の生命をいかに有効につかいはたすかをあせるかのように、懸命な生長をいそぎ、繁殖の手段をめぐらすものもある。美しい花の中にも前年から準備して冬をこし、忍耐づよく開花期を待っているものがあるかと思えば、春の日ざしにたちまち蕾をふくらませ、はなやかに咲きでるものもある。自然のもつすばらしさ、その豊富で変化の多いいとなみをつらぬく、あざやかな運動法則は、私たちのふかい関心をよびおこすものである。

ここに今、東京近郊にふつう見られるものを中心に、春の野の花の中から数十種を選んで、採集などにも便利なように排列し、その中で、草木の生長発展の有りさまを、できるだけさぐるようにつとめた。

ヒメシャガ

タンポポの実

春まだあさい頃，野辺に路ばたにほほ笑むように花をひらくタンポポは，さながら春の野のシンボルである．くわしくしらべると，タンポポにも，全國では 20 ほどの種類があり，関東ではきいろい花がふつうであるが，四國や九州では，表紙にあるようなシロバナタンポポが，多くみられる．シロバナのほうは，葉もみどりの色がうすく質もやわらかい．東京では大正 12 年の震災をさかいに，その姿が極めて稀になった．

一輪の花にみえるのは，じつはたくさんの小花の集團で，小花はそれぞれ舌狀の花冠（花瓣全体の総称）をなし，一つ一つの小花は，花がすむと，軽い毛をつけた実になって，風のまにまに飛びはじめる．実は偶然落ちたところに小さい芽をだし，翌春の用意にかかるが，その根は多年生でふかく地中に入り，幾年かのうちに大株を形づくる．

タンポポ
（廓　大）

フキの実

フキの花

東北地方では，これも春早く，幾枚もの大きな鱗片状の葉につつまれて地上に顔をだすフキの花を，バッケァーとよんで，雪どけのもたらす春のことぶれとしてよろこぶ．いっぱんには，フキノトウの名でしられる．

この花もタンポポ同様，たくさんの小花が集まって一輪をなしているが，タンポポでは舌状だった花冠が，フキでは管状である．花をむしってしらべると，株によって小花の形に二とおりある．帯黄色で先が五つの小さい切れこみをもち，上からみると星形のものが雄の花．ほそい管で，ややむらさき色をおびたのは，雌の花である．雄のフキノトウは，みな雄花をつけるが，雌の株には少数の雄花がまじっている．花がすめば雄花はしなびるが，雌花のほうは茎や枝がのびて背が高くなり，実にはしろい絹糸がはえて風に飛ぶ．葉は食用に供せられる．

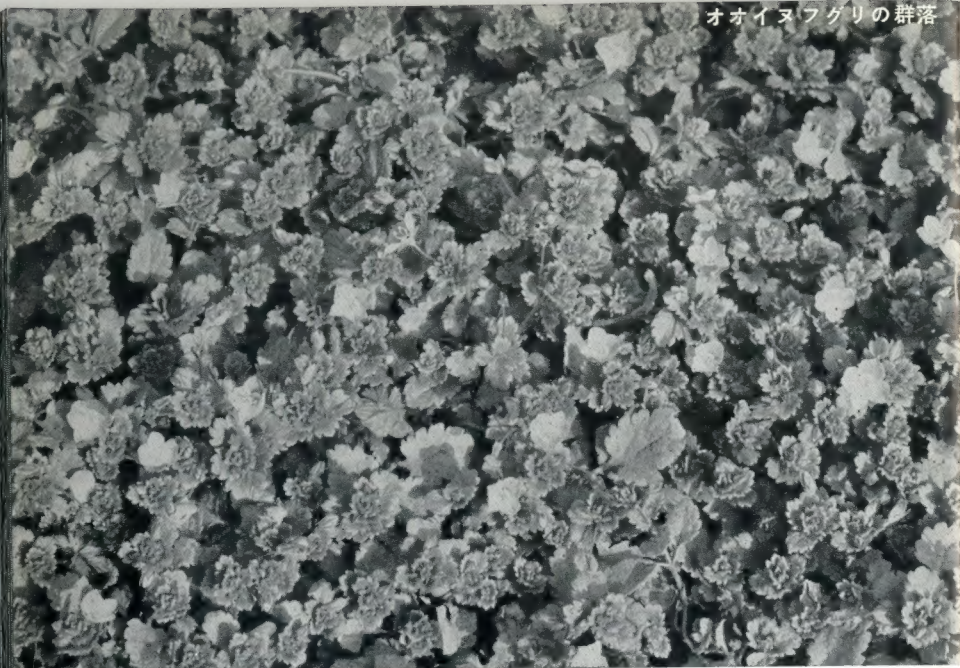
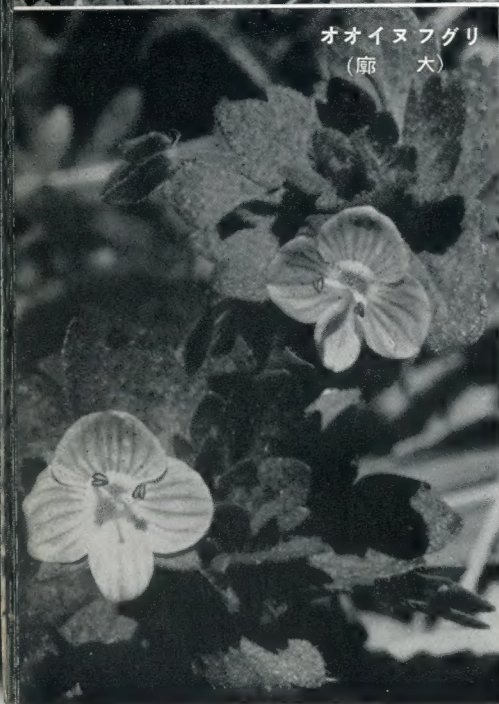
フキのとう

アヅマギク

ハハコグサ

ムラサキタンポポは，タンポポに姿はやや似てはいるが，同じキク科のなかでも縁遠いほうのなかまである．面白いことにこの草には二つの形があり，春早く咲くこれは，高さ10 cm内外の可憐なもので，花は少数の小花が，一列に放射状にならび，その背面はむらさき色をしていることが多い．花がすむと根もとから長いツボミが幾本もでて，葉よりもはるかに高くのび，開かずに実になる．この形をセンボンヤリとよぶ．アズマギクは，関東以北の山ちかい原野に多い多年生の草で，周辺の舌状花は淡紫色，中心の管状花はきいろい．茎は光線のくるほうへ屈動する．ハハコグサは，春の七草の一つでオギョウの俗名をもち，花は小さく黄金色で，よく人目をひく．

ムラサキタンポポ
（廓　大）

オオイヌフグリの群落

オオイヌフグリ
（廓　大）

日かげをこのんで咲くレンプクソウは，丈15 cm ほどの多年草．茎は四角で，中ほどに２枚の葉が，向きあってつき，その１枚１枚は，深く三つに裂け，その裂片がまたあさく三つに裂けている．茎の頂端には，淡緑色の小さい花が，５個密集し，頂端の花は，花被（花のなかで，シベをかこんでいる器官）が四つに裂けていて，雄シベは８本ある．頂花以外の，横がわにまつわる花は，花被が五つに裂け，雄シベを10本もつ．

オオイヌフグリは，ヨーロッパ原産の２年草であるが，明治のはじめ，日本にわたってきて，短期間に全國にひろがり，どこへいってもみられる．花冠は深く四つにさけ上方のものがもっとも大きく，左右のものがこれに次ぎ，下方の片がいちばん小さい．雄シベはたった２本．実は扁円形で２部にくびれ，四つにさけたガクに包まれている．

レンプクソウ

キランソウ

ムラサキサギゴケの花

ムラサキサギゴケの蕊

オオギカヅラ

白いのをサギゴケ，むらさきのものをムラサキサギゴケというが，同じもので，田圃のあぜなど，しめったところに多い．背のひくい，多年生の草で，根もとから枝がのびだして繁殖する（これを匐枝という）．花冠は，上下の二脣にわかれ，上脣は小さくて，先はめくれて，二つにわれているのに対し，下脣はふくよかに大きく，三つにわれて，その中央の膨みに斑点がある．雄シベは4本，その2本が長い．雌シベの花柱（子房と柱頭の間の細長い部分）は長く，二つにおれた板状の柱頭の内面に花粉を受る．

キランソウは，道ばたや土手に多くみる多年草で，茎が地にふして，四方にひろがり茎にも葉にも毛がある．小さな花は，むらさき色でくちびる状をなし，下脣が大きい．オウギカズラもこの兄弟で，花は淡紫色，根もとから長い匐枝をだし，葉形がちがう．

ムラサキサギゴケ

トウゴクシソバタツナミ

ヤマタツナミソウ

オカタツナミソウ

タツナミソウのなかまは，わが國に 10 種あまり産するが，どれも花が茎の先端に集まって穂をなし，筒形の花冠が 2 個ずつ並んで，直立しているので，さざなみのたつような感じにみえる．タツナミソウの名のおこりもそのようすによる．花冠の筒は先に向って太くなり，先端は短く上下の 2 脣にわかれ，上脣がドームのような形をするのに対して，下脣はひろがって紫点をもつ．

ヤマタツナミソウは，おもに山すそなどに多く，花の色がうすいのと，葉に丸味がなくて卵形である点がタツナミソウとちがう．トウゴクシソバタツナミは，背が低く，葉が大きくて長い種類で，葉のうらはむらさき色をおびるが，花はタツナミソウよりうすい．葉がむらさきでないものをアオシソバタツナミとよぶ．オカタツナミソウは本州と四國に分布し，葉が長く穂がみじかい．

タツナミソウ

ラショウモンカツラ

ヤマルリソウ

ラショウモンカツラというすさまじい名は昔この草が支那の続断(スウトウアン)（筋骨をつなぐ藥草）のなかまと考えられていたので，羅生門の鬼のうでをつないだという傳說からつけられた．本州，四國，九州に分布し，茎は四角で，根もとから長いつるがでて地をはい節ごとに根をだして繁殖する．茎の中部以上の節ごとに，花をつけるが，色は薄紫で上脣に二つ，下脣に三つのきれこみがある．

ヤマルリソウは，東京附近の丘陵にたくさんみられるムラサキ科の多年草で，ワスレナグサに似て淡碧色の花をつけるが，花のあとには，丸くてふちにギザギザをもつ眼玉のような形の実が，ガクの中に四つならぶ．チョウジソウは，荒川の下流の原野などに多い多年草．50～60cm にのび，ヤナギに似た葉がたくさんつき，茎の頂には藍紫色の，星形の花が数おおくついて美しい．

チョウジソウ

サクラソウの蕾

サクラソウの開花

サクラソウ

昔から園藝植物として，人に愛玩されたサクラソウは，いま何百という品種がつくられているが，もとはこのような野生の一種を先祖にしているのである．四國以外の日本全土に生じ，ノサクラソウともよばれる．花はふつう淡桃色，まれには純白のもある．

写眞は，4月初旬から5月中旬までの，サクラソウの成長を追ったもので，これを撮影した荒川下流の田島ヵ原（埼玉縣）は，サクラソウの自生地として知られ，天然記念物に指定されているが，最近はだいぶ荒らされている．花卉園藝がさかんであった徳川中期，江戸の好事家がここに近い戸田ノ原にサクラソウをさがしもとめ，小さくて花にしぼりのある変りだねのものをみつけ南京小櫻の名をあたえて愛玩した話が，享保18年(1733)に発行された本にのっており，この辺が櫻草の名所だったことがわかる．

サクラソウの芽

ナガバノスミレサイシン

スミレサイシン

スミレも，春の野といえば，すぐ思いうかべる草であるが，やはり日本種だけで 80 種以上もあり白，紫，黄などさまざまな色がある．花の構造は大同小異で，5枚の花弁の下方の一つが，後につきだして距となる．子供がこれをひっかけあって遊ぶので，スモウトリバナともいう．日本には香りのあるスミレは少いがヨーロッパ産のニオイスミレは香水の原料になる．

マルバスミレ

ケマルバスミレ

マルバスミレとケマルバスミレとは，同じ種類で，ただ葉に毛のあるなしで区別される．白地にむらさきのすじのある花がさく．

エゾノタチツボスミレも，花は白いが，その形がだいぶちがって，ぜんたいに小さく花瓣も細くて，上の方の2枚は他の3枚とはなれて，犬の耳のように立っている．イヌスミレの異名も，そこから生れたらしい．ふつうのスミレ，スミレサイシン，マルバスミレなどが，いずれも茎がみじかく，花の柄が根もとからのびだしてみえるのに対して，このスミレは，長い茎が30 cmほどものび，節ごとに葉をつけて，その腋から花の柄がでている．本州の中部以北から北海道にかけて分布し，富士山麓にも多いがときに薄紫色の花をつけたものもある．スミレのうち，このように茎のはっきりみえるのを，有茎類とよび，他を無茎類という．

エゾノタチツボスミレ

アオイスミレは，各地にごくふつうにみられるスミレで，春あさい頃淡紫色のかわいい花をつける．その時期には葉も小さく花がはっきりみえるが，後には大きなアオイに似た葉がしげり，やがて匐枝をのばして繁殖する．それでヒナブキの名もある．株ぜんたいに毛が深く，実にまでも毛がある．

ヒゴスミレは，はじめ九州で発見されたのでその名がついているが，本州中部以南に分布している．他のスミレとちがうのは，葉がてのひら状に深く五裂し，その各々がまた三つに裂け，それがさらに三つに裂ける点である．花の色は白い．エイザンスミレも，葉がてのひら状に裂けるのはヒゴスミレに似ているが，きれこみがほそくない．花がすんでからでる葉は，形も大きく，ふかく三つに裂けるだけで，別の草のようである．花は淡紅紫色で，かすかな香がある．

コスミレは，もっともふつうのスミレで，全國に分布し，三月頃から淡紫色の花をひらく．ニョイスミレは，有茎類の一種で花は小さくて白く，むらさきの線がある．その距はみじかく，袋の形をしている．原野のやや濕氣の多いところにはえる．もとツボスミレとよばれていたが，その名はあやまりであるというので，さいきんは如意スミレと改められた．シハイスミレは，葉の背面が紅紫色をおびるのでその名があり，本州，九州，四國の山麓丘陵に分布している．花は淡紅紫色で直径1.5 cm．距は筒状で長い．アケボノスミレは，本州の各地に分布し，やはり春早く，枯草の中から，長い柄のある花をひらく．その頃は葉はまったくのびず，たたまれたまま土から顔をだしている．やわらかい淡紫紅色の花がまだ冬の名ごりをとどめる野に咲きでるさまは，いかにもアケボノの名にふさわしい．

ヒナスミレは本州中部の特産で，前頁のシハイスミレに似ているが，葉の幅がひろく細長い卵形をなし，質がやわらかい点で区別がつく．花は淡紫紅色．ヒナスミレには葉の表面に，白いまだらをもっているものがあり，それをフイリヒナスミレとよぶ．
フモトスミレもこれに似ているが，葉がずっと小さく，卵状楕円形をなし，花は白く下瓣にむらさきの細いすじがある．本州の中南部から，九州にかけて分布している．
ツボスミレは，ヤブスミレともよばれ，分布のひろい有茎類の普通種で，東京附近では藪の中でよくみられる．距が長くて管状をなし，花は淡紫色であるが，まれに純白の花もあり，シロバナタチツボスミレとよばれる．これこそツボスミレとよぶのが正しいということで，近頃はタチツボの名はすてられた．茎や葉に形の変ったものが多く，ケタチツボスミレは有毛の変種である．

ノウルシの芽

荒川下流の戸田ヵ原や，田島ヵ原のような湿潤な原野に，群をなしてはえる多年草にノウルシとよばれる雑草がある．のびきると1mからになり，細長い葉をたくさんにつけるが，茎や葉を切ると，有毒な乳液を出すので，ウルシになぞらえて，この名がある．その白い液には，骨状のデンプンをふくむ．しかしウルシとは何の関係もない．

春のはじめ，このような原野をみわたすと冬枯れしたままの枯葉や枯茎がうちふしてさらに生氣がないが，やがてノウルシの芽があちこちに現れ，茎をのばし，幾千となく群をなして地表をおおいつくす．茎がのびてツボミをつける頃は下の葉はことさらにきいろみをおび，遠目には花とみまがう．季節の推移とともに，他の雑草もあとからあとからとおい茂り，たえまない自然のいとなみのさかんなさまに，おどろく他ない．

ノウルシの花

レンリソウ

ノウルシの葉は，長楕円形で，葉柄もふちの切れこみ（鋸歯）もなく，裏面にはこまかくてみじかい毛がはえている．中肋（葉の中央をとおる太い脈）の左右には，多くの側脈があり，その色はくっきりと白く目立つ．枝には淡黄色で卵形の苞葉が，2〜3枚つき，そのわきからさらに細枝がでて，そのさきにきいろい小苞葉があり，花はそのもとにつく．一つの花とみえるのは，たくさんの花の集まったいわゆる花序であり外側は5枚の苞（葉の変形したもので，花に接近してつく）が合一した壺形の総苞にとりまかれ，中に小さい雌花，雄花がある．

レンリソウは，スウィートピーのなかまで葉の先のまきひげで他の草にまつわり，ひとり立ちはできない．他の草につらなる意味で連理の名もついた．茎にはヒレがあり枝の先に紫碧色で蝶形の花が集まってつく．

ニワフジ

カラスノエンドウ

カラスノエンドウも，まきひげによって立っている雑草で，いたるところの原野にみられる．ヤハズエンドウの名もあるが，それは，数対のヤハズ形の小葉が，中軸をはさんで左右にならび，その全体が1枚の葉をなしていることにもとずく．時には，まきひげがなくて，かわりにふつうの小葉のあるものがあり，それをツルナシカラスノエンドウとよぶ．葉腋に 1〜2 個ずつつく花は，マメ科に共通の蝶形て，淡紫色をしている．この類は，やわらかいので牧草や緑肥として役だち，ドイツで改良した品種は，ザートウィッケンとして知られている．

ニワフジは，本州中部から九州にかけて分布する灌木状の野草て，葉はやはり羽状複葉て，6〜8 対の小葉からなり，楕円形て裏が白い．花は，ふさのようにたくさんあつまり，淡紅色，まれには白色て，美しい

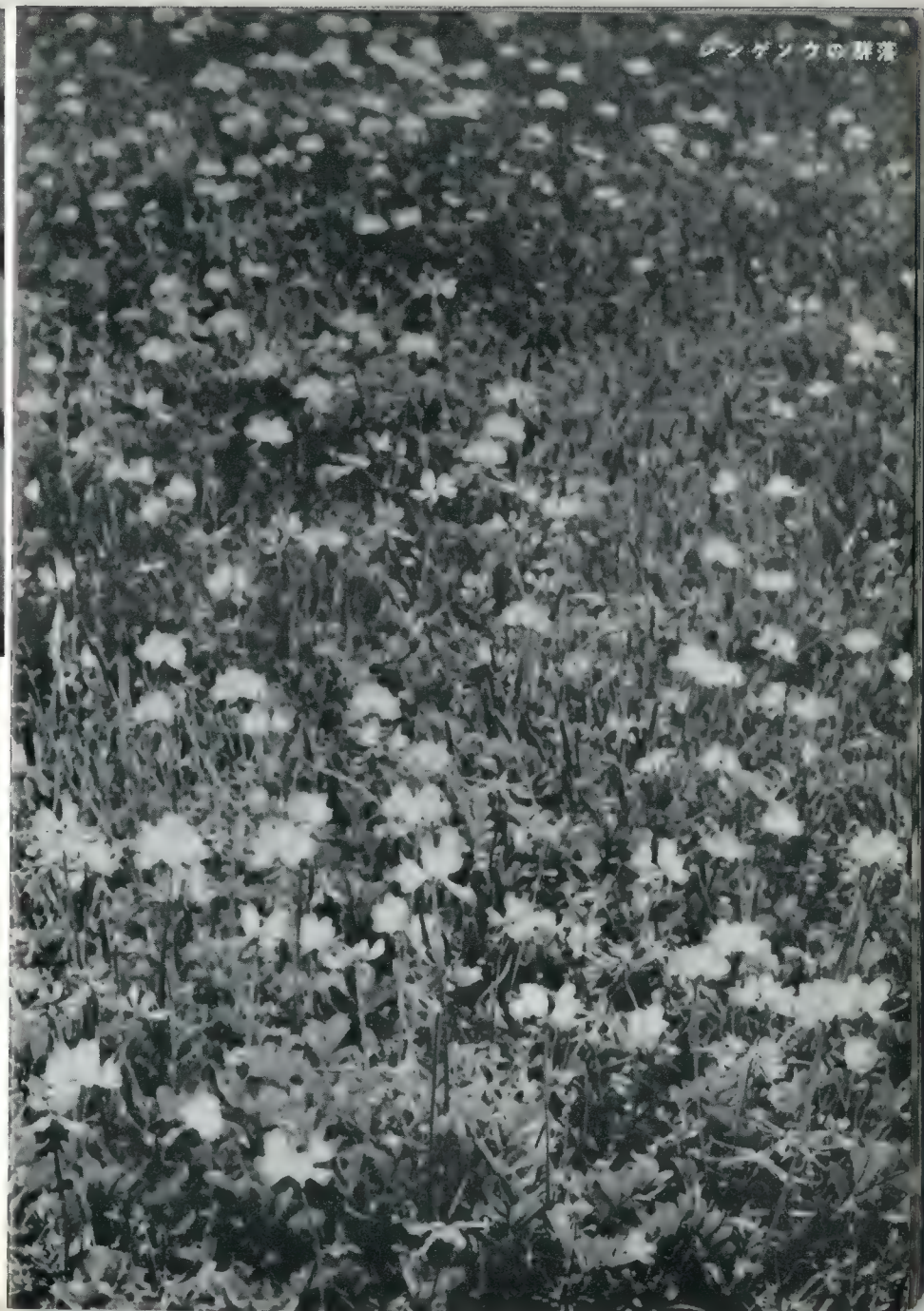
カラスノエンドウ

レンゲソウ（拡大）

ミツバツチグリ

レンゲソウの群落

レンゲソウは，中國では古來紫雲英とよばれたが，春の田圃をおおってあやをなしているさまは，古代の人がそう名づけた氣もちを思いうかばせる．マメ科の他の草と同じように，根に根瘤（こんりゆう）をもち，その中の根瘤菌が，空氣中のチッソをとって固定するので，緑肥用として田にうえられるのである．秋のすえ種をまいて，春花が咲く頃に，田の中へすきこんでしまう．葉は，奇数羽狀複葉で，5〜6 対の小葉からなる．花はその葉腋から長く直立する柄の先に，6〜7 個ずつついて，輪狀をなしている．レンゲの名は，花の姿がハスの花を思わせるところからついたのであろう．色は紅紫色であるが，濃淡の差があり，時には純白のもある

ミツバツチグリは，全形がイチゴに似て，それより小さく，花はきいろい．実は赤くならず，水氣もなくて，食用にはならない．

ヘビイチゴは，ヘビのたべるイチゴという意味でこの名があるが，べつに毒ではない．イチゴとちがって，花はきいろく，実は味もかおりもなくて，食べてもうまくはない．

ヤブヘビイチゴは，ヘビイチゴに似て，すべてがひとまわり大きく，実の直径は2cm内外．ヘビイチゴの実より色がこくて，まっかになる．葉は三つの小葉からなり，側方のが二つに切れている点もヘビイチゴとちがう．長い匐枝をだして盛んに繁殖する．

タネツケバナは，湿地にたくさんはえる越年草で，高さ20cmほど．直立した茎から枝がわかれるが，茎は緑色又は暗紫色で，かよわい．春，枝の先に，柄のある小さな白い十字形の花をつけるが，この花の咲く頃になれば，農家では，種籾(たねもみ)を水につけるので，タネツケバナという名がついている．

ヤマブキソウ

昔，中國から渡ってきた観賞用の植物に，ケマンソウというのがあった．エンゴサク科の植物で，花が華鬘（佛像を装飾する花形）に似ているので，そうよばれたのであった．同じ科の草で，葉がややこれに似たものの中，花のきいろいのをキケマン，藪に咲くのをヤブケマンなどと名づけている．しかしヤブケマンは，ケマンソウの花とは似ていず，ラッパのような形の花が集まって，長い穂になっている．ふつうむらさき色なので，ムラサキケマンともいうが，色に濃淡の変化が多く，時には白にちかいのもある．ミヤマキケマンは，山地にはえて葉はこまかくきれこみ，花はきいろである．

ヤマブキソウ，一名クサヤマブキは，花の色がヤマブキに似ているが，ケシ科の草であるから形はまったくちがい，花瓣は４枚で雌シベは１個，実は，細い円柱形をなす．

イカリソウ
（廓　大）

イカリソウは，山足丘陵の木の下にはえる多年草で，葉はその根もとからでて，長い柄の先が三つにわかれ，その先が又三つに分れた末に，卵形の小葉を1枚ずつつける．それで三枝九葉草といういかめしい名もづいている．花は長い茎の先に，穂をなして下向きにさがり，色はふつう淡紅色である．ガクは8枚，それが内外二列にならび，外側のは早くちり，内側の4枚が大きくて紅紫色になる．花瓣は4枚あって，内側のガクよりは短いが，2 cm ほどの距をもっているために，全体がイカリに似た形にみえる．

ルイヨウボタンは，深山の林の下草としてはえる．やはり多年草で，葉がボタンに似てみえるのでこの名をもつ．花は小さくてきいろのかった緑色である．フクジュソウは北海道にゆくとたくさんの野生のものがみられ，マンサクとよびならわされている

イカリソウ

雌シベ

花を外からみる

ウマノアシガタ

雄シベ

ウマノアシガタは，全國の原野にキラキラしたきいろい花を咲かせ，人の目にしたしまれているが，有毒の草で，なめればヒリヒリと辛いから注意せねばならない．ヨーロッパにも，これによく似た草があり，その花をアゴの下へもってゆくと，きいろい色がはだに写るので，「この子はバターがすきだ」といってたわむれあう．それでバターカップ（Buttercup）とよばれている．ウマノアシガタの類はどれも花瓣に光沢があるが，それは，花瓣の細胞がこまかいデンプン粒をふくんでいるからである．ふつう5枚の花瓣があるが，八重のものもあり，キンポウゲとよばれる．まれには段咲きのものもある．雄シベも雌シベもともに多数あり，花の中心の花床（軸）についており，花がすむと一つ一つが熟して別々の実になり，それぞれが1個の種子を入れるちいさい卵形の実は，短いくちばしをもつ．

雌シベ

ニリンソウ

キクザキイチリンソウ

夕暮のニリンソウ

アネモネの類は，花のつくかずで，イチリンソウ，ニリンソウ，サンリンソウなどというのがある．イチリンソウは，又の名を一華草ともいう．いずれも，花弁のようにみえるのはガク片であり，花弁はない．葉は根からでて，長い柄があり，多くは三つに裂けている．そのほか，花のつくほそい柄の下に，3 枚の葉があるが，これは総苞とみとめられている．ガク片の数や，形には変化が多く，イチリンソウでは，ふつう 5 枚で白色，裏側がうす赤いので，ウラベニイチゲの名もある．ニリンソウは，ガク片が5～7枚で，色はやはり白く，葉をひたしものにして食べる地方もある．花は日をうけて開き，夕方には，とじてうなだれる．

キクザキイチリンソウは，淡碧色のガク片が10枚ほどあり葉はこまかに切れる．アズマイチゲは，花が白く，葉は2度3裂する．

イチリンソウ

アズマイチゲ

実のあるオキナグサ

ヤマシャクヤク

オキナグサも，アネモネの一種に数えられることもあるが，近頃は別の属に入れられる．イチリンソウのなかまとちがい，葉も茎もガク片の外側も，ビロードのような白い絹毛につつまれる．花はつねに１個で，ななめ下に向いて咲き，暗紫紅色である．オキナの名は，花がすんで茎がまっすぐにのび，やがて長い花柱の上に絹毛がいっぱいにはえ，全体が白髪のようにみえるところからきている．山足の原野や河原など，日あたりのよい乾燥地に多く，実はうれると長い尾をひいて，風のまにまに飛びちる．

日本に野生しているシャクヤクには，二種あって，一つは白い花のヤマシャクヤク，一つはもも色の花のベニバナヤマシャクヤクである．ベニバナのほうは雌シベの柱頭が細くのびて巻き，シロバナは柱頭がみじかくて太い．花の咲く時期もちがっている．

オキナグサ

若いヒトリシズカ
(拡大)

ヒトリシズカ

ヒトリシズカは，全國いたるところの低い山にみられる多年草で，茎には 3～4 の節があり，全体は紅褐色をおび，節ごとに2個の鱗片がむきあって並ぶ．茎の上端には4枚の葉が，ちょうど車輪状であるかのように相対してはえる．葉の一つ一つは楕円形で，みじかい柄があり，ふちにはするどい鋸歯がみられる．この4枚の葉につつまれて，白い花の穂が現われる．花は花瓣などがないまる裸で，雄シベ雌シベが一つずつあり，雄シベはまっ白で，深く三つにわれ，中央の1本には葯（やく）（花粉の袋）がない．

フタリシズカは，ヒトリシズカに似て大きく，花は穂になり2～3本でる．純白で裸，シベの排列はヒトリシズカと同様だが，三つにわれたどれにも葯がある．茎は綠色で6～7節．上部の2節がやや離れ，各節一対の葉をつける．葉は楕円形で鋸歯をもつ．

フタリシズカ

エビネ

ホクロ

ホクロは，よく春蘭の名でよばれるが，中國の春蘭とはちがう．全國いたるところにあり，葉はかたく常綠で，線形をして屈曲し，20 cm 以上になる．花茎は何枚もの膜質の鱗片でつつまれ，その頂に直径3〜5cm の花を一つつける．花は淡黃綠色でわずかに香があり，3 枚のガク片がひらいて，先端がやや廣くなってとがる．これは質が厚くてかたいが，脣瓣（とくべつな形をした花瓣）は肉質で，そりかえって，しろっぽい地に，多少の紅紫色をしたまだらがある．

エビネも常綠蘭の一種．葉は 20cm 內外，幅 5〜6 cm．質はうすく，たてにヒダがあり，地に接して平たく敷く．葉の間から長くのびた茎に，10 個ほどの花が穗をなしてつく．直径 2〜3cm．ガク片も花瓣もすっかり開き，紫紅色をおびた脣瓣は，ふかく裂けて，中央の裂片の先端が凹んでいる．

エビネの花（原　大）

アツモリソウ

クマガイソウ

クマガイソウとアツモリソウとは，唇瓣の形が，それぞれ熊谷直実と敦盛のせおったほろに似ているというので，この名がある．クマガイソウは，又の名をホテイソウともいい，淺山や丘陵の樹下，あるいは竹林の中にはえる多年生の蘭で，高さ30cm内外，地下茎によって繁殖する．あらい毛のはえた茎の下部には，鞘状の葉が3〜4枚茎をつつんでいるが，上部には2枚だけ扇形の大きい葉がむきあってひらき，その間から15cmほどの茎がのびて，大きな花をたらす．花は直径8cmに達し，唇瓣は淡白色で紅紫色の網目と斑点をもつ．アツモリソウは，山中の草原にはえ，やはり多年草で，高さもクマガイソウとほぼ同じくらい．茎上に4〜5枚の葉をつけ，茎の先端に，クマガイソウ同様一つだけ花をつける．唇瓣は平円形のふくろ状をなし，上部には漏斗状の口を開く．

シロバナショウジョウバカマ

カタクリ

シャガ

キクバドコロ

シャガは，本州，九州の林の中の湿潤地に，大群をなしてはえる常緑の多年草で，高さ50〜60 cm．葉は，革質でつやをもち，扇のように，20〜30cm 程のびている．葉の間から茎をたて，沢山の枝の上には 2〜3 個の淡碧色の花を開くが，その花は朝開いて夕方しぼむ．実はならず，匐枝で繁殖する

キクバドコロはヤマノイモのなかまで，花は小さく淡緑色で長い穂をなしている．葉は大きくて，深く 5〜7 裂する．シロバナショウジョウバカマは，常緑の多年草で，その葉は短い茎から四方にむらがりでる．花は白または淡紅色で，茎の上端からたれる

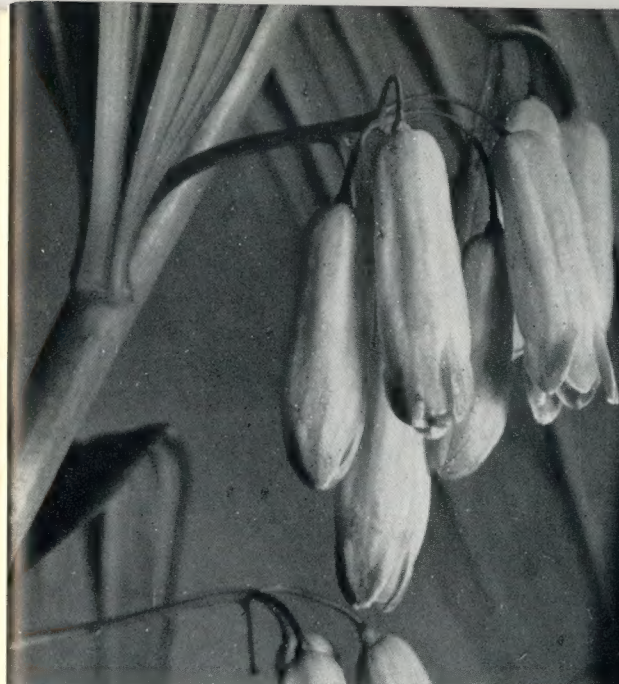
上質のデンプンが地下の鱗茎（短縮した地中の茎）からとれるカタクリは，やはり多年草で，淡紫色の直径 4〜5 cm もある花をつける．葉には白とむらさきの斑がある

縦に切った花

花の展開

下からのぞいた花

子房の横断

ナルコユリの花
（廓　大）

ナルコユリは，全國に分布し，木の下や山地の草むらにはえる．地下茎は，多数の結節からなり，毎年の茎のとれたあとがのこる．地下茎の先端から50 cmをこえる茎がのび，先の方は一方にかたむく．葉は茎の中頃以上に10数枚，たがいちがいにはえ，その葉腋から，短い花の柄がでる．花柄はいくつもの小枝にわかれ，小枝の先に緑白色で筒形の花が下向きにたれる．そのたれるさまが，鳥を追う鳴子に似ているので，ナルコユリの名がある．花は，筒の先端があさく六つにわかれ，もともとは6枚の花被片のあわさったものであることを示している．中にほそい6本の雄シベと，1本の雌シベがあるが，雄シベは下部が花の筒に癒合し，その下端は筒にかくれてみえない．雌シベの柱頭は雄シベとその高さがほぼ等しく，その下に長い花柱をへて，球状の子房があり，子房は3室に分れている．

ナルコユリ

ウラシマソウ

チゴユリ

ウラシマソウの花序

チゴユリは，名のごとく可憐な多年草で，各地の草原に多く，高さ30mほど，茎は1本で，枝をだすことはまれである．たがいちがいにつく葉は，卵状長楕円形で，質薄く，先はとがる．花は茎のいただきに1～2個つき，帯黄白色で，6本の雄シベと1本の雌シベをもつ．子房は，やはり円形で，3室にわかれ，まるい果実をむすび，熟れると黒くなる．ウラシマソウは，地下に扁球形のイモがあり，それから1本の茎をたて，50 cmほどになる．葉は鳥足状にわかれ，15内外の小葉からなる．小さい花が肉質の軸の上につくが，その軸の先端は釣糸のように長くのびて，下にたれている．

この本に載っている花の属する科の特徴

キク科	小さい花が多数集まって頭状をなし，一つの花のように見える．かような頭状花が茎の先に1個ないし数個つく．数個の時には茎の上端のものから咲き始める．小花は單性又は両性．
レンプクソウ科	花は両性で5個密集して茎の頂端につく．頂花は4数，側花は5数，茎葉は対生，果実は核果．
ゴマノハグサ科	5枚の花瓣は合して上下の2唇となり，上唇は2裂，下唇は3裂．雄蕊4又は2個雌蕊は1個．果実は2室の蒴．
唇形科	花瓣と雄蕊は同上．果実は4個の小果に分れる．ハッカやシソなどのごとく，芳香あるものが多い．
ムラサキ科	5枚の花瓣は合一，等様に5浅裂，雄蕊5個．果実は4個の小果に分れる．花は穂になってつく．
キョウチクトウ科	5枚の花瓣は合一，5裂，雄蕊5又は10個．果実1個又は2個の蓇葖，多く乳液を含む．
サクラソウ科	5枚の花瓣は合一，5浅裂，雄蕊5個．果実は1室の蒴，花はおおむね繖形になってつく．
スミレ科	花瓣は5枚で不同．下方のものには距がある．雄蕊5個，そのうち2個には距がある．雌蕊1個，果実はで3裂．
トウダイグサ科	雄花は多数で各單雄蕊の裸花．雌蕊は1個で3室の子房のみの裸花，それが集まって5裂する総苞に包まれて，全体が小さい花のように見える．乳液を含む．有毒なものが多い．
マメ科	花瓣は5枚で不同，蝶形をなす．雄蕊10，雌蕊1，果実は莢．葉は通例複葉．巻鬚のあるものもある．
バラ科	花瓣も萼片も5枚が原則，葉に托葉がある．單葉又は複葉．雄蕊多数，雌蕊は1～5，又は多数．
十字花科	萼片，花瓣ともに4枚．十字形をなす．雄蕊6，うち2本は他よりも長い．雌蕊1，果実は短角又は長角．
エンゴサク科	萼片2，早落性．花瓣4，不同，雄蕊2，各3裂，雌蕊1，果実は蒴．葉は分裂，茎はおうおう液汁を含む．
ケシ科	萼片2，早落性，雄蕊多数，雌蕊1，果実は蒴．
メギ科	花は3数から成り，雌蕊はただ1個．葯胞は瓣状に開裂．花瓣にはおうおう蜜槽がある．
キツネノボタン科	萼片5個，瓣片5個で蜜槽を有するか，又は無瓣．雄蕊，雌蕊ともに多数．果実は痩果又は蓇葖．葉はおうおう分裂する．
センリョウ科	両性の裸花が單純な穂をなし，雄蕊は1個で深く3裂し，左右の1片は葯の半分を擔い，中央のものは完全なものを有するか又はそれを欠く．葉は対生し，鋸歯縁．
ラン科	葉は平行脈を有し，花は両性，花被は2列で各3片から成り，内花被片の1は異形をなして唇瓣と呼ばれる．雄蕊は雌蕊と癒合して蕊柱をなし，花粉は塊状，子房は1室でねじれ，ために花は倒立する．果実は蒴で種子は微小．
アヤメ科	葉は剣状で2列に並ぶ．花は両性でおおむね多数茎の頂端につく，6個の花被片は2列に並び，3枚ずつ同形，下部癒合．雄蕊3個，雌蕊1個．果実は蒴．
ヤマノイモ科	他物にからむ草で，地下にイモを有する．葉は心臓形で切れ込みがあるか又はなく網状脈を有する．花は雌雄株を異にし，おおむね淡緑色で目立たず，長い穂になる．
ユリ科	葉は平行脈．花は両性，6個の花被片は2列をなし，ほぼ同形．雄蕊6個，雌蕊は1個，果実は蒴で3裂する．
サトイモ科	花は両性又は單性で，雌蕊1個．雄蕊は6個又はそれ以下，微小．肉質の花軸上に多数密集．花軸の上端はおうおう延長．総苞は筒形で，その先端が舌状をなすことがある．多くは地下にイモがある．葉は網状脈を有する．

ツ ク シ

シロバナタンポポとオオイヌフグリ